

「真理の御国！！」

～この世と神の国～

ヨハネ 18：28～41、ヨハネ 8：12～59

ある男性が人生で初めての手術を受けるために入院することになりました。翌日の手術までの間、彼は病室のベッドで不安と恐れの中を過ごしています。看護師は眠れない彼を励ますのですが不安はなかなか取れません。そこで、少しでも彼の不安を和らげようと看護師は担当医を呼びました。急に呼ばれたその若い担当医は状況があまり理解できていないまま病室の彼に話します。「不安なのは当然です。あなたにとっては初めての手術なのです。実は私も不安なのです。担当医として初めての手術ですから。」それを聞いた男性は余計不安になりました。

■ 想定外は想定されている

私たちにとって想定外の事が起きると不安になりますが、今の時代においては想定外というものはありません。なぜなら想定外な事が起きるという想定がなされているからです。この数十年、想定外だという事が起きるようになっていいますが大震災も原発事故も豪雨災害も懸念し想定していた人がいたにも関わらず誰も耳を傾けていなかったのです。旧約聖書の中ではイエス・キリストがどのような方なのか想定するように伝えていますが、ユダヤ人たちは理解できず彼らの常識の中で想定しただけだったのです。

1970年、ビルマのウタント元国連事務総長が「世界の人口は、5億人から10億人に倍化するのに250年かかった。しかし、35億人から70億人になるのにはたった40年しか要さなかった。爆発的な人口に対し、食料の増産は限度があり、資源はただただ減り続ける。」と著書に記しました。現在、私たちの生活はサービス、産業、環境破壊全てが最絶頂にあります。人間よりも優れたコンピューターにより、あと20年もすれば人間は不要になっていくでしょう。

私たちが20年後を想定できるのは、まさに今なのです。

■ この世のルールと御国のルール

総督ピラトの「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」という尋問に対して、イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」(ヨハネ 18：36) イエス様が地上におられた時、王として治めたのは地上の国ではなく、イエス様を信じる人達の神の国でした。この言葉は神の国という定義を聖書全体に現わしているのです。キリストの答弁はこの世の答弁とは違うものでいつも嘯み合いませんでした。

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わ

たしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。(ヨハネ 8：12～15)

パリサイ人は人間的な常識で、正しい事を証言するのは人間がするものだと考え、イエスの言葉に納得がいきませんでした。神の国に生きるイエス様は自分が言っている事の根拠を知っています。ですが私たちが明日どうなるかもわからないまま「私は正しい」と言って生きているのです。とても怖い事です。あなたが正しいと誰か決めるのでしょうか。この世のルールは常に変わります、あなたの言っている事は明日間違いだと証明されるかもしれない事、国が変わればルールが変わる事を理解しなければいけません。変わるルールは、もはやルールではありません。

■ イエス様とニコデモの会話

ユダヤ人の指導者であったニコデモはイエスを反対するパリサイ派の一員であったが、人目を避けて、夜ひとりでイエスを訪ねては教えを聞いていました。「どうしたら神の国に入ることができるか」という彼の質問に対してイエスが言ったのは「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」でした。ニコデモは真意を理解できず「人は年をとってから生まれることがどうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができませんか。」二人の話は嘯み合いませんでした。神様の国では神の愛ではない道に生きることが罪であると言っています。自分たちのルールで生きたパリサイ人にはわかりませんでした。

また、ヨハネ 8章でユダヤ人に対してイエスは語られています。「・・・わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」イエスがこれらのことを話すと彼らに「多くのか者がイエスを信じた。多くのユダヤ人が一度はイエスを信じました。」ですが、この世のルールで会話をしたため、この章の最後に書かれているのは、「すると彼は石を持ってイエスに投げつけようとした。(8：59)」のです。これはイエス様を信じているクリスチャンについて言われていることです。自分のルールが受け入れられないとやはり石を持ってしまおうのです。イエス様の国が近づいてきた時に受け入れられるかどうかはあなたがパリサイ人のように生きるのかクリスチャンとして生きるのかの決断なのです。この世のルールで生ければ納得いきません。聖書の中でもイエス様とこの世の会話はいつも嘯み合いませんでした。神の国とこの世と何が違うのでしょうか。

■ 本当の子育て

また親であれば簡単に変わってしまうような、この世のルールを守らせようとする子育てはするべきではありません。ルールで育てるとその子は周りかすれば同じことをするようになります。親が与えることで満たされた子どもは本来、神のルールで聞かれる祈りでも、すぐに聞かれないと、つまづく子になってしまいます。親は聖書のルールで、間違った時に戻ろうとする心、どんな境遇でも満ち足りて周りに決して流されず決断する子を育ててください。世界は今後、間違いなく物質がなくなります。神様は目先の小さな祈りを聞かれるのではなく、最高の時、環境で全てを整えて最善な物を与えてくださるお方です。私たちはイエス様の生きざまにより真理をもって感謝し聖餐をし続けていきたいと思うのです。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハ 8：31～32)

2000年前から伝わるこの言葉は今もなお変わりません

■ 神の国の真理を探し主に信頼すること それを決意する者

あなたの心が騒ぎ腹が立ちイライラした時は、この国のルールで生きているということなのです。人の目、耳で判断すれば不安になり心が騒ぎ、人を裁き、逃避したりします。神の国で生きようとする時、人の語る言葉も神様から示されたものであれば心が騒ぐことはありません。すべての人が神の国に残るとは限りません、私たちは神の国を選ぶ決断をしなければならぬのです。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や驢馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押さえなければ、あなたに近づかない。悪者には心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者には、恵みが、その人を寄り関心。正しい者たち、主にあって、喜び、楽しんで。すべての心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。(詩編 32：8～11) 悪者とはこの世のルールで生きている主に信頼しない神様から離れている者です。あなたのルールを捨てて、この世の国に生きるのか御国の大使として生きるのかどちらを選ぶか決めてください。十字架を思い起こし主に信頼して生きる事を選ぶことが出来ますように。

(要約者：西崎 真由美)

(2018年9月30日)